

自我心理学がソーシャル・ケースワーク に与えた影響

杉 本 照 子

序 論

日本において、これまでに「ケースワークの心理主義偏重」の問題がとりあげられて、批判としてなげかけられてきた¹⁾。しかし、これは、実践の中には普遍的には実在しないものに対する批判である²⁾。ケースワークが、個人または家族を対象として、その個人と家族が関連している社会環境全体との「社会関係」³⁾を取扱っていく限りにおいて、個人対社会環境の相互作用に関する知識を必要とする。そして、個人と環境との相互作用には人間と人間、人間と集団、人間と社会との関係を含み、人間個人の理解と、その環境としての他の人間、集団、社会の理解を必要とする。ケースワークの直接の対象は、伝統的に個人であり、家族であって、個人または家族の中の資源と環境内の資源を、最大限に活用することによって、個人の社会的機能をより効果的にし、より満足のいく社会生活を可能とするために援助するのである。焦点は、個人と社会環境全体との相互作用である。20世紀の前半における個人心理、集団心理、社会心理の発達にはめざましいものがあり、たとえ、それが一時的に「心理主義の波」として、否定的または肯定的態度をもってむかえられたにせよ、人間性の理解に多大の貢献をなしたことは、否定できない事実である。要は、それらの知識が、いかにとり入れられ、過去40年の間、ケースワーク実践の中で用いられ、そして、ケースワーク独自の機能に寄与したかという点が重要だと考える。

日本では、ケースワーク原則や態度が部分的に捉えられ、それら技法が基礎をおいている重要な知識、理念、価値が除外されるという現象も起こっている。その重要だと考えられる知識の中に、人間の身体的・精神的・情緒的・社会的発達の過程に関する統合された体系を含むと考える⁴⁾。日本

では、社会福祉の制度の施行といった管理的要素はうち出されているが、管理的場においても、個人をどのように理解し、把握し、対処するかについての知識の体系化に未だ欠けている。米国においては、この知識は従来、医学、精神医学、社会科学にその基礎を求められてきたし、更に、1950年以來、行動科学の名称の下に科学的に人間行動を研究しようとする学問の諸分野にも求めようとしてきた⁵⁾。これらの分野からの概念や理論は、これまでに、ケースワークに重要な影響を与えてきた。その最も古くは、精神分析理論、さらに自我心理学であり、ここ数年、特に他の行動諸科学の概念が、ケースワーク実践の中で役立つか、どうか試されている段階にある⁶⁾。実務上の有効性が実証されるにつれて、それら概念をケースワーク理論と実務に統合していく過程にある。

日本においては、ケースワークの実践理論が未だ、統合、組織化されておらず⁷⁾ その様な段階において、ひたすら「心理主義克服」の批判で、自我心理学の貢献を否定し去るのでなく、その有効性の検討がなされなければ、日本におけるケースワーク理論の発展に生産性をあたえることはできないであろう。「心理主義偏向」の批判は、この心理学的知識をケースワークの重要な基盤として理解し、消化し、役立たせる努力を失なわせることになると思う。社会的に志向するケースワークの一方の端には、必ずや人間個人が存在し、パーソナリティに媒介される限りにおいてのみ、社会の影響も個人の行為にみられるのである。ケースワーク分野においても、長年、「個人か環境か」の論争があり、この解決が、ケースワーク発達の、方向性を決めるといわれてきた。インケルス(Alex Inkeles)は、「個人の行為というものは、どんなに強く社会環境の決定的な影響を反映するものであっても、かならず個人的なものである。

……二者択一的に片方を否定し去るのでなく、社会構造についての主要な事実とその構造の中で活動するパーソナリティに関する主要な事実の相方を、より大きな説明図式のなかにおいて、両者を統合ないし、協同させることである。」と言っている⁸。このような考え方が、おそらく米国における、行動科学の分野を発足せしめるに至ったのだと考える。

「医学は、昔は生物学の応用科学にすぎないと考えられていた。今日、生物学自体が、物理学、化学、数学等の自然科学各分野の応用の集積の感を呈し、医学もまた、同様な意味において自然科学各分野の統合とも考えられている。今や臨床医学は、単なる基礎科学知識の応用ではなく、臨床医学それ自体が高等複雑な自然科学知識のインテグレーション化した精密科学となりつつあることを強調したいのである。」と大阪市立大学の藤森速水氏は言っておられる。ケースワークの歴史と医学のそれとは、その発達の場合からいって、比較すべくもないかも知れないが、ケースワークの実践理論の体系化の過程に関しては、類似点も見出すことができよう。

ケースワークの過程を、「関係」を媒介とした力動的過程であるとすれば、「関係」の力動的過程の中から普遍的な法則を抽出すべき努力をすべきであるというのは、中園氏の主張である⁹。そして、これは可能であると考えられる。

この小論では、自我心理学が米国において、どのようにして、人間理解のための基盤を提供し、ケースワーク手続きに一定の法則をあたえ、実践理論に貢献したかという点について考察したい。自我心理学の影響は、広範囲にわたるので、本論では最も意義があると思われる点と、特に日本でも研究され、応用されて価値があると思われる範囲に限定せざるを得なかった。日本のケースワーク現場で実際の仕事についておられる方々をスーパービジョンする機会にも恵まれ、日本の現状において役立てられると筆者が確信する点について指摘したい。ケースワーク実践理論に寄与しつつある行動諸科学の他の概念については、将来の考察の対象としたいことを附加しておく。

注1) この主題に関しては、戦後日本の社会事業、日本社会事業大学編の中のケースワーク論の展開—その

心理主義への偏向の克服を中心として—小松源助を参照にされたい。

- 2) 米国においても、ケースワーカーが「治療費の低額な精神科医になりさがらないこと—put the social back to social casework」—等の反省や批判がなされてきた。一部にそのような傾向がみられたとしても、社会事業が実践されている多くの施設における、ケースワークの実体は心理主義偏向からははるかなへだたりがあった。支持の技法、直接的指示、助言、反省の話合い、社会資源の活用、開発、送致などを通して、実際の、具体的諸問題に関する援助が多く比率を占めていたと思う。
- 3) ここで用いる社会関係は、人間関係だけでなく、それを含んだ、個人と社会制度集団との関係を指している。制度志向的役割と集団志向的役割の二種の役割関係として捉える。社会関係の主體的側面、客體的側面について、岡村重夫、全訂社会福祉学総論 柴田書店、P.105~159 を参照されたい。
- 4) 中園康夫、戦後におけるケースワーク研究の動向と課題、社会福祉学、第6号、1963年日本社会福祉学会編、全国社協発行によれば、personality 理論は、精神分析的 personality 理論の借用はあっても、ケースワーク独自の理論としては生れていない。心理—社会的次元、因子を内包した理論をケースワークも持つことが必要だとして、このことへの理論的示唆を中園氏は Talcot Parsons の社会的行為に関する理論に求めている。
- 5) 大阪家庭裁判所首席調査官、北沢治雄氏も、少年保護に従事する者の診断、治療能力の低さに言及される。「人間を扱う私達の能力が未だ極めて低い。これは、行動科学がまだ試行錯誤の域にある、若い学問であることが根本的だと思うが、さらにそれすらも、私達要員が系統的訓練をへていないということになる。」
- 6) その主なものは、「役割理論」「小集団理論」「コミュニケーション論」「家族理論」「文化の影響」などである。
- 7) 児童福祉法第十一条の2の児童福祉司の資格規定中、「心理学、教育学若しくは社会学を専修……」とあって、社会福祉学という分野規定がない。厚生省の「保健所における医療社会事業の業務指針」でも、「社会科学の立場から医師を援助……」となっている。
- 8) アレックス、インケルス、社会学とは何か、辻村明訳、現代社会学入門、至誠堂、P.106~107
- 9) 前掲、中園論文、P.78

フロイド理論と自我心理学：

自我心理学の基礎は、フロイト (Sigmund Freud) の精神分析理論である。フロイトとその弟子達は、1880年代から1937年にかけて、主とし

てウィーンを中心に精神分析を発展させたが、その多くが、ユダヤ人であったため、ドイツのアカデミックな精神医学の主流に受け入れられることが少なかったといわれている。フロイトは、1893年にブロイエルと共著で、「ヒステリー研究」を出版した。それから、1900年迄の間に、無意識の動機、抑圧、転移、および神経症の原因に関する理論を発展させていった。フロイト理論に関しては、1900年～1930年頃の間、チューリッヒ大学のブローラー(E. Bleuler)やユング(C. G. Jung)、ウィーン大学のハートマン(H. Hartman)、フェダーン(P. Federn)、ブダペスト大学のフェレンツェ(S. Ferenczi)などが大学精神医学の中で、精神分析を学び、精神医学との統一に努力した。その中のハートマンは、自我心理学の創始者とされている¹⁾。

フロイトが、米国において自己の見解を発表した最初は、1909年、マサチューセッツのクラーク大学における招待講演であった。フロイトは、終生、自己の研究と理論の修正を続け、1920年代にその考え方を根本的にあらためた。その一つは、パーソナリティ構造の新しい構造体として、エス(Es)、自我(Ego)、超自我(Super-ego)の3つが考えられるようになった。この理論を更に発展させたのがフロイトの弟子の一人である、ハートマンであった。1938年のナチスのオーストリア併合と第二次大戦を契機に、フロイト、アナ・フロイト、M・クライン(Klein)等のロンドン亡命をはじめ、シルダー(P. Schilder)、ハートマン、フェダーン、アレキサンダー(F. Alexander)ドイチェ(H.)、ランク(O. Rank)、ホルネイ(K. Horney)、ライヒ(W. Reich)、フロム、ライヒマン(F. Fromm-Reichman)等の精神分析学者の米国亡命が相次いだ。これらの人々は、1940年～1950年にかけて、米国精神医学に多大の影響をあたえた。米国の伝統的な、マイヤー(Adolf Meyer)に発するPsycho-biologyと融合して、今日のいわゆる力動精神医学を形成した²⁾。

フロイト心理学や自我心理学の影響が、ケースワークの分野にみられはじめたのは、1930年に入ってからであった。ケースワーカー達は、それまで長年の間、アルコール中毒患者、非行者、麻薬中毒患者、精神薄弱者、問題行動児をもつ母親、

離婚に当面している人々を対象としていて、それらの人々の行動の理解を焦眉の急務としていた。行動の解明とその変化、コントロールのための手がかりを何とかして得ようとしていた。現実さまざまの問題をかかえている人々に直面しているワーカー達は、どんな方法にしろ、とにかく対処しなければならない立場におかれていたのである。フロイトの理論と技法は複雑であると同時に時間がかかって、高価であるということで、直接的にケースワークに影響をあたえたのではなかった。それは、まわりまわって、間接的につたわってきたものであった。また、ケースワークは単にフロイト心理学や自我心理学の概念を消極的に受け容れたのではなくて、それらの概念が、ワーカーの経験の中で、証拠だてられ、分析理論によって説明され易かったので選択したのである。勿論当時の米国におけるプラグマティズムの哲学が、選択に影響をおよぼしたことも、分析理論の合理性を思うとき無視できない。フロイト理論は、精神医学やケースワークのみならず、米国においては、心理学、文化人類学、社会学といった社会諸科学にも広く影響をあたえたのである。

フロイトは、1923年、「自我とエス³⁾」の中で人格全体の構造を解明し、この精神構造内部の力動的な力関係の葛藤(intrapsychic conflict)を理解し、ヒステリー、神経症はじめ各種の精神医学の対象の病態心理の特徴を内的衝動と不安に対する「自我防衛機制」の形で捉え、精神分析の神経症理論を完成した。

フロイトが、病態心理の研究から入っていたのに比べて、ハートマンやロウエンスタイン(R. M. Loewenstein)、クリス(E. Kris)などの自我心理学者達は、常態心理においても同様のメカニズムがあることを主張した。自我構造の葛藤によらない部分についての考察をして、精神分析理論が一般の発達心理学となることを期待していた。フロイトによる無意識の心的過程の分析によって、人間の奥深い、暗い部分について知って、いかにそのような部分によって自分の行動が影響されていたかを認識することによって、大きな治療効果をもたらすとしている⁴⁾。しかし更に一歩進めて、そのような自分を社会のなかに適応させてゆくためには、自分自らを社会的人間として教

育することが必要となってくる。これがユングのいう教育であり、このような方法を強調発展させたのは、自我心理学者の一人、アドラーである。ハートマンも、適応の概念をあきらかにし、社会的学習経験を強調した。フロイトは、人格が主として、幼少期の要因、特に家庭内の要因によって決定されることを強調したが、自我心理学は、幼少期の経験だけでなく、その後の影響も重視した。精神分析理論は、その弟子達によって修正され、また他分野からの影響によって、各所において現代的発展をとげていったのである。その詳述は、ここでは可能でないが、現存在分析、自我心理学の時代を迎え、それはやがて今日の米国の力動精神医学に融合されるに至った⁵⁾。この発展の過程において分析理論は、社会科学や行動科学の枠組において研究されサリバン (H. S. Sullivan) やホルネイ等の人間関係学派とよばれる精神医学者を出した。

これら人間関係学派の人々は、「生物学派」の学者達からは、「文化学派」と評されることもあった。フロイトも最後まで、米回流環境主義への不信をなくすことはできなかったと言われている。しかし、フロム・ライヒマンは、「人間経験は、いつでも生体のうちにおこる諸過程と結びついていて、あらゆる人間は、心理、生物的統一体である⁶⁾。」と考えていた。

注1) J. A. C. ブラウン、フロイトの系譜、精神分析学の発展と問題点、宇津木、大羽藁訳、誠信書房、S. 41

2) 精神療法の理論と実際、三浦袋栄監修、医学書院

3) フロイト：自我論、フロイト選集、井村恒郎訳、日本教文社

4) 河合隼雄、ユング心理学入門、培風館、P. 248

5) Hartman, H. & Kris, E., The Genetic Approach to Psychoanalysis, In Anna Freud, et. al. (eds) The Psychoanalytic Study of the Child, Vol. 2 N. Y. International Univ, press.

Hartman, H., Kris, E. & Lowenstein, R. M., Comments on Formation of Psychic Structure, In Anna Freud, et. al. (eds.) The Psycho-analytic Study of the Child, Vol. 2, 1947

6) フロム・ライヒマン、人間関係の病理学、早坂泰次郎訳、誠信書房

自我心理学とソーシャル・

ケースワーク：

ケースワークが理論的に体系化されたのはじめての試みは、1917年にリッチモンド (Mary Richmond) が「社会診断」(Social Diagnosis) を出版した時にさかのぼる。これは、ケースワークの実際の仕事を組織だてたのはじめての業績であった。対象者の問題を理解するための方法論について書かれていて、社会診断、個別化、自己決定、対象者とワーカー間の関係の相互性といったケースワークの諸原則がうち出されている。リッチモンドも述べているように、この著書は、出版される約15年前から資料が集められはじめ、それに基づいて書かれたので、その内容は20世紀初期のケースワーク実践に則して書かれたものであった。当時の心理学は、主知主義であって、社会改良の時代でもあり、ケースワークは、社会的環境条件の調査を重視し、心理的要因にはさほど関心が払われていなかった。また、社会診断と社会計画をたてる過程については詳しく書かれているが、ケースワーク処遇(治療)については、あまり書かれていなかった。

近代社会事業の萌芽ともいわれる慈善組織協会運動 (Charity Organization Society Movement) は、英国では1869年に、米国では1877年におこったが、当時の社会事業は、貧困者を特殊集団として全体的に捉えていたところに特色があった。COS運動では、対象者の個別性を強調して、貧困者といえども何ら共通する要素をもち合わせていないことの認識にたつて、友愛訪問活動がおこなわれた。リッチモンドは、対象者との友愛的接触を重んじ、訪問者の態度に関する優れた描写をおこなった¹⁾。リッチモンドは、プットナム (James Putnam) を引用して、「社会関係とは、他者との深い関連性を意味している。社会関係こそ、精神生活の歴史を示すものであると同時に、人間の幸福と有益性をおびやかす原因も、また、その回復をはかる方法をも、ともに、この社会関係の中に求め得るのである」とのべている²⁾。この様に対象者との関係重視は、友愛訪問活動時にさかのぼるが、「ケースワーク関係」という用語は出現しておらず、「接触」というあまり持続性を示さな

い用語が対象者との関連をあらわしていた。また家族がワーカーに協力しない場合には、「A家族は協力せず。ケースは打ち切られた。」とのみ記録されてあって、人間関係における「抵抗」の概念に対する考察も未だみられていなかった。しかし当時から今日に至るまで、ケースワークは伝統的に個人とその家族を中心として援助をおこなってきたのである。「社会診断」以前におけるケースワークの社会的接近方法は、個人と家庭生活における地域社会の要因を強調していた。フロイト心理学が強調したのは、小家族集団が人間の態度を決定する最も重要な影響力であるということであった。ケースワークの伝統的な対象と、当時の新しい心理学のそれとが一致し、ケースワーカーは、医療チームの一員としての役割を認められて、家族に対するケースワーク機能は重要なものとなっていく。当時、米国で指導的立場にあった精神医学者達は、(Adolf Meyer, August Hoch, William White, Salmon, Suthard, Gleuck, Dunham, Campbell などであるが……) 各種収容施設や精神衛生の分野におけるケースワーカーの役割を早くから認識して強調したのである。精神科医や心理学者達との協同は、第一次大戦後の参戦兵士の平和時への適応援助に端を発して、後に情緒障害児、問題児、精神障害者、非行者援助のための協働へと発展していった。この密接な協同関係の故に、ケースワークが多くの知識を精神医学から得たし、精神医学も治療における患者の社会的側面の重視へと新しい関心を深めていったと言えよう。これは、精神科医とケースワーカーとの多くの共同研究にもみられる。特に地域社会を対象とした精神衛生対策における共同では、顕著である。

米国におけるケースワーカーの専門職業教育過程の中で、最も読まれているのは、フロイト、ランク、ユング、アドラー、リブル (Ribble)、スピッツ (Spitz) との調査結果が出ているが³⁾、このほか、サリバン、エリクソン (Erick Erickson)、フィニシャル (Otto Fenichel) をあげることができよう。前述したように特にアドラーの心理学は社会学的であり、アドラーは個人的に社会主義者との親交厚く、社会との関連を重視した。アドラーの心理学は楽観主義にいろどられていたとも言

われているが、フロイト心理学が人間の病態そして否定的面にとらわれており、そのために社会に自ら適応する力を失う人に対して、積極的に働きかけ、教育するという観点をさしていると思われる。自我心理学の中のオプティシズムは、ケースワークにとって、重要な役割を果たしている。対象者の中にも、ケースワーカーの中にも、そして人間誰にもある潜在的な力、人間の可能性の優位に対する信頼感を助けたと思う⁴⁾。しかし、筆者はそれを単なる教育的なものにしないために人間の非合理性と無意識に着目しなければならないという黒川氏の意見に同意する⁵⁾。自我心理学者の一人であるエリクソンはハートマンの自己 (Self) の概念を「自己同一性」として理解し、「自我同一性」(ego-identity) と区別した。この社会的に志向した概念は、更に、ケースワークの関心である、家族と社会に対して、家族同一性、社会同一性の概念にまで拡大されて、個人の側から社会をみるばかりでなく、社会の側から個人をみるみ方となった。

ケースワークは、フロイトによって得られた洞察、その生物的衝動を根源として、それが成熟し発達していく過程 (Psychosexual development) に人間関係学派の洞察も併せて用いることを意味する。ケースワークは、対象者の全人格に、その全人格の全生活面とのかかわり合いをもつ総体として、働きかける固有性をもつからである。

注1) 一番ヶ瀬康子、アメリカ社会福祉発達史、光生館

2) ヴァジニャ・ロビンソン、ケースワーク心理学の変遷、杉本照子訳、岩崎学術出版社

3) Ruth M. Butter, An Orientation to Knowledge of Human Growth & Behavior in Social Work Education, Council on Social Work Education.

4) 小山隆編、現代家族の研究、弘文堂、P.411

5) フローレンス・ホルス、ケースワーカー心理社会療法—黒川、本出、森野訳、岩崎学術出版社中あとがき、黒川氏による。

自我心理学の影響：

次に自我心理学がケースワークに与えた貢献を3つに大別して考察してみたい。

I. 対象者理解

1. 自我構造—行動と動機の理解

2. 家族関係が性格形成に与える影響。
情緒的社会的成熟。生育歴、生活史の重視。

Ⅱ. ケースワーク関係の展開

1. 転移、逆転移現象の理解
2. 同一化現象。修正関係。

Ⅲ. 援助の方法（特にケースワーク関係の展開と関連して）

1. 抵抗の意義
2. 洞察、支持、明確化

精神分析の技法とケースワークの根本的違いは分析療法では、自由連想法、夢解釈がその中心技法であって、分析の目標は、無意識の幼時期の葛藤を十分に究明し、それを治療者との強い転移関係を通して再体験することによってもたらされる洞察を通して、患者の神経症的パーソナリティを変化させ、再統合させる。それに反して、ケースワークは、外界に志向し、対象者の理性的部分を対象としている。精神内の問題それ自体より、対象者が現在おかれている外界の現実との関連において捉え、調整すべく援助を行なう。

Ⅰ. 対象者理解

自我心理学の知識は、従来何故に対象者がそのような行動をとるのか判らなかつた原因の解明に役立つのである。かくされた動機、相反する感情が共存する事実、罪障感、不安感、依存性、攻撃性、心的構造（パーソナリティがエス、自我、超自我そして意識、無意識、前意識から成っていて、防衛機制を用いるメカニズム）、人間の情緒的・社会的成長発達過程とあるいは、未成熟な段階に止まっている状態に関する知識は、ケースワーク診断とそこからケースワーク援助の方針を導き出す基礎として不可欠である。以上の用語や概念は、分析理論の所産であるが、それを、人間個人とその人のおかれている社会的、情緒的環境の相互作用にあてはめて用いることによって、対象者理解を可能とするのである。人間が特定の状況下で、何故そのような反応、態度、行動を示すかの理解は上記の知識なくしては、可能でない。従来は、非行少年、未婚の母、失業者などという用語で、分類されていたケースワーク診断が、本質的に機能的な考え方に基いてなされるようになった¹⁾。フロイド理論の影響によって、ケースワー

クの診断分類は、発生条件や原因的となったとホリスはのべている。次に日本のある病院でケースワークの対象となった事例のケースワーク診断の例を参照としよう。

ケースワーク診断——患者は重症肺結核の主婦であり^①、そのために感情が不安定になっている。したがって療養の条件に対して適切な適応とはいえない状況にある^②。とくに夫に対しては、両面価値的な態度^③を強く持ち、不満と自責の感情に支配されている。家族は生保受給中である^④。夫の患者に対する気持は、積極的、好意的^⑤というよりも、自分自身にとらわれているので、むしろ消極的といわなければならない。夫は極端に対人的接触を回避し^⑥、患者との面会を實行できないことで消極的関係の傾向が具体的に表現されている。園芸はその意味でかれにおいて、現実からの逃避を可能とするが^⑦、かれにとっての適応の一型式とみることができる。次女は父親を感情的に支持し、子供でありながら同時に家政遂行の役割を担わなければならない^⑧。父親と長女との間には、職業の選択にあたって価値葛藤がみられ、それが長女にとって、父親に対する反発となっており^⑨長女はむしろ母親を選択したのである。

①と②は問題の様相を示すもの

③は①と②の心理的側面

⑤⑥⑦は原因論を構成する父親の心理的要因

⑧⑨は家族員によって遂行される家族機能の心理社会的側面²⁾。

上記の例で示されるように、ケースワーク診断は、対象者のおかれている状況、療養所という社会環境と患者の要求（病気を癒すというニード）との関連性における困難、そして更に患者と家族という社会集団間の力動的相互関係において問題を把握し、家族がおかれている経済状況との関連もあきらかにされている。ケースワーク診断が、精神医学的診断と異なる点は、すなわち、人間の社会関係における問題を対象としているケースワークの独自性を示しているといえよう。その社会関係における相互作用の診断には、心理学的概念や用語が用いられている。

「自我」の概念は、社会関係を対象領域とする

ケースワークにとって、非常に有用なものである。「自我」は、人間の内的欲求と外界の現実が人間に要求するものとを調停する役割を、その機能の一つとしてもっている。つまり、人間の人格構造の理性的部分であって、環境との接点であり環境との接触と内的欲求とのたえざる相互作用によって発達していく。この自我の働きが人間の行動をある程度、きめていく。故に自我はその成長の過程を通して、直接的には各種社会制度内の集団や規範、文化性と深いかかわり合いをもち乍ら成長していくのである。特に分析理論と自我心理学は、自我の成長の出発点において、母子関係、父子関係、同胞関係等の家族関係、そして更に、成長と共に拡大していく社会関係、交友関係、家族以外の成人との関係等の性格発達に及ぼす影響に光明をあたえた。診断学派とよばれるケースワークでは、現在の人間を理解し援助するのに過去の出来事を知ることが屢々必要であるとされるがそれは、さかのぼれば、フロイトの精神生活の決定要因に関する理論の影響によるものである。精神面の出来事は過去に歴史をもつとの仮説にたって、生育歴を重視した。しかし、今日のケースワークは、現在の状況にある対象者の理解を重視しており、分析療法と異なる点は、すべてのケースにおいて、過去の生育歴や生活史を重要だと考えているわけではない。例えば、現在の問題解決のために、「自己の非現実的で不適切な行動を是正するために、発生的、あるいは歴史的面からの考察が必要となる場合」には³⁾、必要とするのである。この援助手続きをホリスは、力動的、発生的要因の反省的考察とよんでいる。児童の情緒障害、行動問題に関する援助の場合には、屢々、生育歴は重要である。前述したように、ケースワークは、一人の人間の全生活面に関する総括的情報を必要とする。人間の関係しているあらゆる社会制度集団とのかかわり合い——そこでの機能の仕方の総合を知ることである。岡村氏の指摘する「人間を全体として捉える」把握の仕方である⁴⁾。その場合でも、ケースワーク援助の対象となる問題によっては、自我の発達の仕方を知り、自我が過去の出来事にどう対処してきたかを知るために、過去の発達の段階をおって社会生活に関する生活史を得ることが重要になる場合がある。自我心理学は

対象者のもっている内的資源を外界とのかかわり合いにおいて評定するための、ケースワーク診断に欠くべからざる貢献をなしたと考える。

Ⅱ. ケースワーク関係の展開

ケースワーク援助がなされていくその媒介は、人間関係であることの認識が友愛訪問活動当時からあったこと、併し、それが接触という短期の交意を渉味する用語であらわされていたことについては既述した。対象者の問題解決を援助するためには、必要な人間関係の理解は、分析理論の「転移」の概念によって、ケースワーク治療の意味をもつところの「ケースワーク関係」に発展したのである。

精神分析における人間関係は、転移、逆転移、意識内の現実関係から成り立つといわれている。精神分析用語や概念が、ケースワークの経験のできことを説明するのに用いられた場合、意味が変更、修正されてきて、厳密な意味に用いられない場合がある。ケースワークでは、潜在的あるいは実際に転移がおこったとしても、それは、主として客観的世界の現実基礎をおいている。しかし人間の態度や行動を変えるためには、必然的に情緒的要素が強められなければならないから、ある種の処置目的のためには、転移をたかめるかも知れない⁵⁾。

転移という用語が、ケースワークで始めて用いられたのは、1924年、トロントにおける社会事業全国大会で、タフト (Jessie Taft) によってであった。転移は、患者が治療者に対して、幼児期の対象関係にあった人、大抵の場合、両親に対してもった幼児的、無意識の情緒態度を転じるメカニズムをいう。その情緒的態度は、愛情的反応(肯定的または陽性的)であったり、敵意のこもった態度(否定的または陰性)である。精神分析学では、転移感情とは、対象関係にあった人に対する感情と限定しているが、多くの場合、ケースワークでは、その根源が判らず、オリジナルな感情がその後の生活の中の人々におきかえられ、持続し続けた転移の故に、もとの人物に対する感情が修正され、否められてしまっているのかも知れないとする。時には幼児以後の生活上の重要な対象関係からの転位としておこることもある。故に、ケースワークでは、このように拡大した意味で転移

が用いられることがあって、この場合、厳正な意味での転移の使用とはいえない。

ケースワークでは、治療上の諸手続きや条件が無意識の内容を表面に出すことを制限するので、(例えば、対面面接、時間や期間が短期である、面接回数の制限、自由連想法や夢解釈を用いない等々) ケースワーク関係と分析治療には非常な違いがある⁷⁾。ケースワークでは現実的關係を強調し、できる限り転移を促進しないよう心がける。それにもかかわらず、ケースワークが多くの面接回数を必要とし、内容が实际的で具体的サービスの提供でなく、心理的、パーソナリティ問題を含む社会關係の調整になってくると転移がおこり易くなる。スターバ (Sterba) は、人間關係を用いて援助する場合には、多かれ少なかれ転移現象がおこり得るとのべている。故にワーカーは転移について知って、それをコントロールするすべを知らなければならないと主張する⁸⁾。ケースワーカーがとる許容的で受容的態度は、直接的である助言や忠言を用いる場合より、転移はおこりやすい。ワーカーに長期に依存しなければならない状態におかれた時、人は自分の運命に力をもつ人に対する恐れからくる否定的感情と同時に、両親に対して抱いていた陽性の要素も部分的にもちこむことが往々にしてある。ケースワークの最も主要な援助手続きである「支持的技法」のある部分は転移をおこさせることになり易い⁹⁾。ケースワーカーと対象者間の關係が、現実的肯定的關係にある場合は、ワーカーはできるだけその關係を保持しつつ、問題解決を現実的な面から援助する。しかし次のような場合には、転移は認められコントロールされる必要がある。(1) 転移がケースワーク援助の障害になる場合。抵抗、陰性關係、過去の葛藤の繰り返し。(2) 転移神経症。(3) 建設的・生産的でない依存關係。過去に満たされなかった欲求の充足にのみ關係を用いる。

逆転移現象に関しては、それが、ワーカー側の援助能力に關係してくることが分析理論から得られ、ワーカーの自己覚知の問題提起となった点のみ指摘して、詳細はページ数の都合で割愛する。転移現象の理解は、(1) 対象者の行動、態度の理解(2)抵抗の理解(3)問題理解としての診断を助けると同時に、ケースワーク治療に重要な意義とケ

ースワーク治療過程の解明をもたらした。次にそのケースワークの処遇面に言及しよう。

Ⅲ. ケースワーク援助の方法

ケースワーク援助は、ケースワーク關係の展開を媒介としておこなわれることについては既に何度ものべた。そして、そのケースワーク關係における転移が、限定された転移であり、それによって得られた情緒解放で十分な限定された現実的援助を受けた、対象者は社会施設に来るのである。情緒的解放は、リッチモンドの時代からの、ケースワークの一方法であったが、そのような名称があたえられるようになったのは、精神分析以後である。示唆、操作といった方法とその名称についても同様のことが言える¹⁰⁾。ケースワークは、パーソナリティの深い探索でもなく、分析療法のようなパーソナリティの完全な再組織は目ざさない¹¹⁾。しかし、行動の変化を伴ったパーソナリティの部分的強化、修正は、ケースワーク援助に附随的におこってくる。ホリスは、それらを、自我の知覚能力や現実検討能力の改善、防衛の変更、要求の変化、超自我要求に対する反応の変化、本能的な生活の成熟等々としてあげている¹²⁾。筆者も自分が取扱ったケース、その他の社会福祉施設ケースをスーパービジョンした際に、ワーカーと対象者間の肯定的陽性關係(それを転移と証拠だてられない場合もあるが、拡大された意味での転移として解釈した)が、ケースワーク効果をもたらし、対象者に何等かの行動変容、あるいは、予防的意味での現状維持を可能とした例を多くみている。それら実例を示す紙数のないことは残念であるが、またの機会に譲りたい。それらのケースの中では、ケースワーク關係において、ワーカーが対象者の父や母、年長の同胞としての役割を任うことが屢々ある。この役割の中で、ワーカーは、助言したり、対象者の考え方や行為を励げましたり、賞讃したり、活動を制限したり、支持したりする。その全活動は、対象者が、ワーカーのもつ適当な感情、態度、考え方を、自分のものとして、とり入れる方向にむけて行なわれる。多くの場合、それらは、対象者が成長の過程において家庭で、または所属した社会集団で得られなかったもの、または得たものとは違ったもの、歪められたりしたものである¹³⁾。ワーカーは、情緒的、

社会的に成熟した人間として、対象者との人間関係を深め、その人が必要としている反応を示し、その人が過去に経験したものと違う人間関係の経験をさせることになる。両親との愛情に満ちた経験に乏しい非行児童、両親に拒否されている怠学児童、両親に充分依存して、依存欲求を満たすことのできなかつた主婦が、病気がちになることによって、その欲求を二次的に充足させようとするケース、母親から女性として母性としての役割を学べず自分の子供に対する役割遂行ができない母、大工としての技術もあり稼働能力もあるのにアルコール中毒で生保に依存している父親、攻撃的衝動のコントロール能力の弱いやくざの青年等々、日本においても、ケースワーク関係における修正関係経験を通して、行動変容が可能になったケースは多くある。このような、修正の人間関係形成は、前述の自我を支持し強める目的をもったケースワークの中心技法である支持療法の各種技法の使用によって可能になる。

以上のようなケースワーク関係では、フロイドが、自我の防衛機制の一つとしてあげた「同一化現象」が、多かれ少なかれ、おこっているのに気が付く。フロイトは、「同一化」は正常な対象関係での適応に成功しない場合に、自我がとる退行的な適応様式であるとのべている。しかし、正常心理の中では、他人の模倣、理想像をめざしての精進など、学習の基本的精神力学であり、乳幼児が社会化していくのにこの機制を利用している。これは、自我が発達して、独立した主体性をもつようになると、むしろ意識的な学習の過程となって、一定期間、ある特定の対象に同一化しながら自主的な学習の情緒的基礎づけを得るため同一化を利用すると、自我心理学では説明されている。対象者は、関係に示されたワーカーのあらゆる資質を感じとり、用いることになる。ワーカーの態度、ものの考え方、もののみ方、自我、超自我の発達も関係してくる。勿論それらは、専門職業家として訓練され、コントロールされたものではあっても、ワーカーの全存在である自己の使用に他ならない。ここにおいて、ケースワークは、「科学であると同時に芸術である」といわれる理由がある。

最後に、「抵抗」と「洞察」の二つの概念がど

うケースワークで用いられるかについて考察したい。「フロイトは、治療者と患者間の治療的交流の障害を抵抗現象とよんだ。気づかない過去の心理的体験で、現在の症状の発生に大きな病因の役割を演じている場合、この病因に気づくこと、無意識の心的過程を意識化させようとする。この治療的働きかけに対して、何とか洞察を得まいとする抵抗現象をさしている。抵抗の原因は、患者自身の病態心理（病的な防衛機制）にある。」と三浦教授はのべている。しかし、その後、サリバンは「抵抗」の概念を、対人的交流の障害を意味する言葉として用いるようになった。それをケースワークでは、現実関係における抵抗として主に用い例えば、援助者側の働きかけ、援助者の態度、社会施設に対するイメージ、援助者と被援助者間の交流の中にある問題などに対する抵抗として捉えた。この抵抗の概念は、従来、ワーカーに判らなかつた対象者理解に役立ち、どのように抵抗を理解し、それに対処していったらよいかという方法に対する示唆を得るに至った。日本においても、対象者が客観的にはケースワークを必要とすると認められていても、対象者自身の自発的同感を得て、ケースワークしないと不可避免的に人権侵害となるという考え方がある¹⁴⁾。この自発的同意を得るという点に、抵抗の問題が入ってくると思われる。抵抗をどのように理解し、取扱うかはケースワーク理論の重要な研究対象領域であって、特に権威を伴った保護的ケースワーク、積極的ケースワーク分野において重要である。

「洞察」は分析理論によれば、無意識に抑圧された心理内容（考え・感情・願望・意図・記憶、それらの意味および因果関連性）を抑圧の緩和を介して、再発見し、理解しなおす心理的過程であった。洞察とは、繰り返し行なわれるところの解釈によって、無意識内の抑圧されたものが理解されるようになることだといわれる。ケースワークでは、洞察の内容は前意識に属するものであるとされている。フロイドは、無意識の探究をおこない、自我心理学者達は、前意識の領域の研究に主力を注いだ。ケースワークにおいて、洞察に導く技法とは、ある特定の対人関係における対象者の行動の性質、原因、結果について、ある程度の理解を増させることとしている¹⁵⁾。洞察にも知的洞

察と感情的洞察があって、知的洞察だけの段階では、行動の変化がおこらないこと、また洞察がおこらなくても、行動の変化をおこさせることは可能である。ケースワークにおける洞察を得させる技法の使用は、自我にどれだけ健康な部分があるかのケースワーク診断がなされてから用いられる。しかし、長年のケースワーク経験から、人間の行動の型、質、それによって他の人におこす反応、結果、どうしたら行動の修正ができるかといった洞察は、ケースワークのさまざまな技法によっておこるもので、特定の技法、例えば、解釈とか明確化とは限らないことが判ってきた。日本では、洞察は、あらゆる場合に不正確さをもって用いられている。明確化の技法も、洞察同様、1930年代や1940年代までのケースワークでは、使用されていなかったものである。

結 語 :

科学理論と実践理論の違いは、科学理論が、現実や事実を解明し理解するところにあるとすれば実践理論はその現実の出来事に対処する方法を必要とするのである。実践理論には、価値観が含まれてくるし、規範的であるより描写的といえよう。実践理論は、組織だった科学的知識に基礎をおいている原則で、実践家の行動を導くものでなければならない。たとえ、それが非行者の行動であれ、行政機構であるにせよ、その一部に変化をおこさせる目的をもった原理でなければならない。行動、そして変化を志向しなければならない。目標を示すばかりでなく、目標達成の方法を示すものでなければならない。理論を実際に用いて、再びそれを理論に feed back していく試みは、容易なわざではない。ケースワークは、心理的諸問題の原因を理解したり、現状改善を実現する手段を知るために自我心理学をよりどころしてきた。その方法と知識は、実際の経験の中で、数十年試され、ケースワークの一部をなしてきた。

日本においては、統合された基礎となる科学的知識の欠除と共に、ワーカーのための系統だてられ、組織だてられた訓練が欠けていると感じる。日本におけるケースワーク実践の積み重ねはまだ日が浅い。ケースワークの日本の実践理論が生れ

出てくる素地が未だ充分でないことを思う。そのためには、ケースワーク記録法の充実、ケースワーク調査、行動科学知識（自我心理学を含めて）の統合と実践への応用などが課題であることを思う。

- 注1) フローレンス・ホルス, ケースワーク
 2) 柏木昭, ケースワーク入門, 川島書店, P.124~125
 3) フローレンス, ホリス, ケースワーク, P.148~165
 4) 岡村重夫, 全訂社会福祉学総論, 柴田書店
 5) ゴードン・ハミルトン, ケースワークの理論と実際, 四宮鑑修, 下巻, 仲村優一訳, 有斐閣, P.186
 6) Jessie Taft, "The Use of the Transfer Within the Limits of the Office Interview," "The Family" Vol. V No. 6 (October, 1924) P.145
 7) この点に関しては、武田建, カウンセリングの理論と実際, 理想社を参照されたい。
 8) Richard Sterba, On Transference, Transference in Casework, Sterba, Lyndon, & Katz, Family Service Assoc. of America, 1949 P.11
 9) 支持的技法は、(1)受容, 関心, 理解を示すこと。(2)励まし。対象者の能力に対する信頼の表明。(3)秘密保持。(4)吐露。(5)実際の・具体的問題に対する助言, 忠言。計画を共にたてる。(6)具体的・実際のサービスをあたえる。(7)教育的役割, 情報提供。(8)患者のおかれた状況に関して客観的に考えます。
 10) フローレンス・ホルス, ソーシャル・ケースワーク, 心理社会療法。
 11) アネット・ギャレット, 面接の技術
 12) ホリス, 前掲書
 13) Benjamin H. Lyndon, Development and Use, Transference in Casework, Sterba, Lyndon & Katz, F. S. A. A.
 14) 小倉襄二, 公的扶助, ミネルヴァ書房, P.187-188
 15) William Reid, A Study of Caseworkers Use of Insight-oriented Techniques, Social Casework, Jan. 1967 Vol. XVIII, No. 1, P. 4